

シリコンバレーというところは、世界でも類をみないフラットでイノベーションを目指していく共和国のような地域になっています。私はアメリカでボストンに暮らしたあとに、シリコンバレーの企業に勤めたのでボストンとシリコンバレーを比較してシリコンバレーを感じることができました。以前、大前研一さんが翻訳されたバークレーの大学教授のアナリー・サクセニアンが「現代の二都物語ーなぜシリコンバレーは復活し、ボストン・ルート 128 は沈んだかー」という著書でボストンとシリコンバレーの比較をしたことがあります。原題は、The New Argonauts: Regional Advantage in a Global EconomyーWhy is it that business in California's Silicon Valley flourished while along Route 128 in Massachusetts declined in the 90s? 」という本です。ボストンの社会はヨーロッパからアメリカに移植した社会。伝統を重んじる社会です。ルート 28 という高速道路の近郊には、1970 年代から MIT・ハーバードからの優秀なハイテク人材や技術が供給され、これに DEC、ワングなどのミニコンピュータ企業が闊歩していながら、その後、1980-90 年代にはシリコンバレーに競争優位性を奪われていきます。本書では、これはボストンの伝統的社会は、垂直統合的なビジネスモデルで自社の技術に固執し、また一旦勤めた伝統のある大企業を転職で辞めることを快しとしない、いわばヨーロッパや日本と同じ社会秩序であるとしています。一方のシリコンバレーは自らのコアコンピタンス以外のものは外部の優れたところから調達する水平分業型のビジネスモデルであり、その中心にスタンフォード大学・カリフォルニア大学バークレー校があり、企業では HP やアップルコンピュータがあると比較しています。垂直統合型の企業が内製主義・秘密主義で仕事を進めるのに対し、水平分業型の企業群では、外部企業とコラボするために情報公開してオープン・アーキテクチャーをベースにしたビジネス展開が中心となります。人材に関しても一生同じ会社に働くというよりは、シリコンバレーのコンピュータ産業に就職するという感覚であり、さらにカリフォルニアというアメリカからアジアの太平洋エリアを見渡すという人種のオープン性も加わり、優秀で技術力・ビジネス力のある中国人・インド人が受け入れられている人種の坩堝のような共和国といえます。私はシリコンバレー企業に勤めたときに買ったカリフォルニアの州旗をいまだに大事にもっており、「この州が独立国になったならその国民になりたい！」そんなフラットでリベラルな社会が西海岸の社会です。